

愛しの芳子さん

徳安 達昌

1

とても、よい気持ちになった。

春の日差しがこころよい。空は、雲が見えない青空になった。

昭男さんは南小倉駅の北側にある小さな公園のベンチにいた。

靴はピカピカに磨いたし、服は着慣れているが気に入っている紺色の一着だ。

ここで一休みしたら、公園から芳子さんの家へは五分も歩けばつくはずだ。

今日は日曜日、昼前の十一時に訪問すれば、芳子さんの両親が待っておられて、父上が芳子さんと昭男さんの結婚を許してくれる。

その手はずになっている。

まだ、小一時間ある。昭男さんは、ベンチの端に腰を下ろして、音を立てて公園の横を通り過ぎる長い電車を見ていた。

色とりどりの春の花でいっぱいこの公園はともかく、駅前のこの町は、なんと騒がしいことか。佐賀の唐津寄りにある田舎で、生まれ育った昭男さんにはなじみがうすい。

事務服姿の女の人が昭男さんを見つけてやってきた。

昭男さんは膝の上の大、小の風呂敷包みを抱えなおした。

さつき買ったお菓子の包みとは別に、もうひとつ、平たくて角ばった重いものが手元にある。公園の花壇を眺めながら、鳩との会話を楽しんでいると、女の人が配達用の袋から大きな風呂敷包みを取り出して、手提げ袋に入れて昭男さんに渡したのだ。

『ここにいたんですか。色が着いてとてもきれいになりましたよ。後で、主人もお宅へお邪魔しますからね』

口早に喋ってすぐいなくなった。

『もう一軒頼まれて急いでいるので、代金はあとでいいです……大事なものだから

ぶつかけたりしないで、持って帰ってくださいよ』

芳子さんの両親はふたりとも栗饅頭を好きだと聞いていた。

何で、こんな時に、……渡した女の人が何者だったのか、もう見当がつかない。初対面なのに昭男さんのことを何にも聴かなかった。

さっきの写真屋を出る時から、そういえば、変だった。

写真屋さんの前では、見知らぬ男と昭男さんの方を見ながら何か話をして、わかりましたという風にうなづいていた。この町には自分によく似たひとでもいるんだろうか。不思議なことがあるもんだ。

そういえば、さっきの男がまだ近くにいてこっちの様子を伺っているような気がする。あの男は駅前で、菓子をもらう時も店内にいた。

日曜日で大安の今日は、芳子さんと晴れて婚約の内祝いである。

松原家を訪ねるには和風の菓子折りのほうが形式に合う。

それならばと、南小倉の駅前の店で少し大き目の栗饅頭の箱入りを買った。

ほどなく、昭男さんは、にぎやかな木町の市場通りを、手提げ袋を両手にぶらぶらさせながら歩いていった。

先ほどの男と同じ背格好が、後ろから歩いてくるような気がしたが、気にしないようにした。だいぶ年寄りの男で、烏打帽をかぶり薄茶色の金縁めがねをしていて、顔中にこわごわしたひげがあった。

まさか、今頃、芳子さんの相手の、昭男さんという人物の素行調査に動いているわけでもなからう。

『今日がそう？ あなたも大変だねえ』

漬物屋のおばさんは昭男さんを見て声をかけた。

何が大変かわからないが、先方は私を知っている。

『はあ、はっ？……お変わりなく、儲かりまっか。』

大阪商人の調子をまねたような軽口が出た。

『まあ、関西弁をはなすの……、ホホホ！』
年をとったおばさんはニコニコした。

昭男さんは二年前、大阪の南千里から小倉へ転勤してきた。

地元の人とは芳子さん一緒に、たびたび店の前で会っている。前にも話をしたお婆さんのようなタイプだが、昭男さんは思い出せない。

『松原邦夫さんのお宅は、……近所でしたよねえ。ここの市場の奥の通り……』

芳子さんと両親が住む松原家の所在を尋ねた。

松原家の両親は長年この市場で惣菜屋さんをしているが、今日は店を閉めている。

『あら？……今日は、松原さんとは大変なんだよね』

お婆さんは口をつぐんだ。

近所付き合いのある人たちなら、松原家の芳子さんに縁談の話が来たことくらい知っている、と昭男さんはかつてに解釈した。

居合わせた他の買い物客たちは横目で昭男さんを見た。

日曜日、有名なこの市場の買い物客に、若い夫婦や子供たちがいつもより少ないのは……どうしてだろうと、昭男さんは思いもなかった。

街の人は自分をなぜか知っている。よく似た人が住んでいる街なのであろうか。

この間、昭男さんが、芳子さんと一緒に長崎の方に遠出した時、この店の夫婦と、前の魚屋さん夫婦にも、挨拶して出掛けた。

魚屋さんのぞくと、初老の太ったお婆さんが、平たい冷蔵ケースのガラスにじゃぶ、じゃぶと水をかけて洗っていた。

魚屋のお婆さんも、昭男さんを見あげてニッコリした。

富永スーパーの前で一台のマイクロバスが止まり、車椅子に乗ってきた年寄りたちが、家族からはなれて次々に、乗り込む。

バスには誠ヶ丘病院 通所介護サービスと書いてある。

家族向けの案内に、通所介護サービスの一日のスケジュールが、絵図面のように描いてある

お迎え

九時30分 開始 健康チェック

十時00分 ラジオ体操、創作活動、入浴、機能訓練

十一時30分 リハビリ体操

十二時00分 昼食

十三時30分 レクリエーション（歌・カラオケ・ゲーム）

十四時40分 おやつ・休憩

十五時00分 終了 お送り

介護の職員たちがそのあとからまた乗り込む。高校を卒業したばかりのような男女の若者もいる。

婦長さんのような……教えるタイプの看護師が、新人介護スタッフたちに小声で伝える。

『富永店（スーパー）の前から四人のかたが乗られます。ここはデイサービスに来られるひとたちが多いですから、粗相がないように気をつけて対応してください』、と。

『ご家族の方はもうさがられてよろしいです』

というのが聞こえる。

送ってきた家族たちは車椅子をたたんで、バスから離れて外に立った。

『それでは、おじいちゃん、おばあちゃん、行ってらっしゃい』

と家族たちは車の外から呼びかける。

元気に笑顔を返すお年寄りもいれば、まったく反応しない年寄りがいる。

昭男さんは、通路の片側に寄って道をあけた。

(*) デイサービス

老人介護の一環として、元気に歩けたり日常生活に問題なければ、毎日決まった時間に、朝と夕方送迎する短時間介護のデイサービスがある。在宅の要支援・要介護高齢者に対し、通所で各種サービスを提供することにより、高齢者の健全で安定した在宅生活の助長、社会的孤立感の解消、心身機能の維持・向上などを図るとともに、家族の身体的・精神的負担の軽減を図ろうとする趣旨による。

寝たきりに近い人、より充実した介護システムの必要な高齢の患者さんを扱う施設としては、別に、特別養護老人ホーム(特養)、グループホーム、介護老人保健施設、療養型施設などの名称で介護システムがある。

公的機関が運営する老人ホームは、入所条件の違いによって、主に「特別養護老人ホーム」「養護老人ホーム」「軽費老人ホーム」の三つに分類される。

有料老人ホームも分類すると、「健康型」「住宅型」「介護型」の三タイプに分けることができるという。

介護スタッフのひとりが昭男さんの顔を見とめて、あら、という表情をした。

婦長さんはそのスタッフに、今日はいいの、と言うような表情をして車の扉を閉めさ

せた。

2

昭男さんは、商店街をまっすぐそのまま抜けて、離れたところにある住宅地の方に歩いて行った。

古い家がいくつも取り壊されて、空き地になった大きなスペースが右側に見える。マンションをまた立てる予定かな……この場所にまた高層の建物が立つのかなと考えた。

左の方に折れ曲がる小さな路地が、三箇所に見えた。

この路地を左へ曲がって、もつと奥へ行くんだったかな、それとも次の路地からだったかなと……考える。

後からついて来た女の人ひとり、昭男さんをだまって追い越した。

その人は一番目の曲がり角のところで、こつちを向いて立っていた。

耳あて帽の白衣に黒のズボン（ストレートパンツ）をはいている。

先の方は公園に通じるのぼり坂で、左右と両側にも小道がある。

『松原さんのお家はこの奥ですか？』

昭男さんが訊くと、女の人は右手で、昭男さんの左側をゆび指した。

ひとさし指と中指の先が曲がっている……指二本が少し変形しているのだ。

見慣れた感じのする土塀をぐるりとまわって、大きな玄関が見える松原家の前に来た。

玄関扉には吊るされた飾り板の表札、赤いポストには巻いた新聞がささっている。

花がまばらに咲いた鉢がいくつか並んで、さて、覚えがあるような気がするが、変わっているようにも見えた。

内側で、電気ソージ機をかける音がした。

もうそろそろ、十一時になる。

今頃、芳子さんの家族が清掃に念を入れているのだろうか。

昭男さんはためらわず、ベルを押した。

聞こえなかったように……ソージ機の音は止まらなかった。

また、押した。

今度は、続けてしっかりと長めに押した。

ソーシ機のような音がやんだ。

あの芳子さんが出てきてくれるはずだ。

扉をあげようとする気配がする。

この前、芳子さんを送って家の前まで来た時には、玄関前に色とりどりに、花が咲いた。

鉢が二十個くらいもあった。

よく手入れされていて、赤、黄、白、紫、黒、茶色と、その混合が見事だった。

芳子さんの母親は花が好きでよく手入れをするということだった。

今日は、なぜか、鉢は三、四個くらいしか見えない。それも、ほったらかしのものを、また並べてみたと言う感じだ。

昭男さんは、後ろの、歩いて来た方角をちよつと振り返ってみた。

白衣の女の人の姿はもうなかった。

例の不審な年寄り男がこつちの方へ歩いて来るのが見えた。

大きな扉が開くと、若い女の人が出てきた。

……？ 知らない顔だ。

芳子さんに似ている……とところがあるが、芳子さんではない。

妹さんがいるということは聞いていなかった。

『あの一、こちらは松原芳子さんのお家でしょうか？』

女は目を見開いて、

『そうですね……』と言って昭男さんを眺めた。

女の人の口が半分開いたままになっていた。

『ボク、小宮昭男です。今日は芳子さんのご両親に婚約を許していただくためにお邪魔しました。』

覚えていたせりふを、一気に、しゃべった。

若い女は、笑っているような泣いているような表情をした。

それから、大きな声で奥に向かって叫んだ。

『お父さんが大変よ、また発作がでたー！』

昭男さんは、なぜここにいいのかよくわからない。

ふらふらと、わけがわからなくなり、記憶が途切れて、重なり合い……気分が悪くな
って玄関にうつぶした。

差し出した菓子折りに左手を添えようとして、もうひとつの手が外れた。

危うく、大きな方の包みを落としそうになって、よろけて手をついたのだ。

『じいっ！どうしたの』

奥から、小学生くらいの女の子も出てきた。

誰かが昭男さんの腕を取って抱えあげた。後をつけてきたあの年寄りの男だった。

3

医者のかんたん脈を取って、今し方、帰った。

昭男さんは座ったまま、周囲を見渡した。

隣の部屋には客が数人来ているようだ。姻戚筋の客ばかりらしい。

ひとりが、

『お父さん、あなたがついててどうしたのよ』

と先ほどの男に言った。

『ちよっと、めまいがしただけさ、本人が、違いの変化におどろいたのさ』

年寄りの男は弁解をするように言った。

『写真をもらいに行くというからそのまま行かせたさ。自分が近くで見ているから、心配ないと思った。オレを、知らない人間だと思って警戒しだったので、帰り着くまで、遠くからそっと、しかし、眼は放さんだったさ』

何度も言った。

男は吉村さんといい、昭男さんとは二歳違う義兄である。

芳子さんの姉の敏子さんの夫で、恰幅のいいヒゲの税理士さんとして、街のひとつには風体が浸透している。

本人が老妻と呼んでいた、芳子さんの姉の敏子さんも、二年前、芳子さんと同じ頃に亡くなっていた。

写真屋さんから、『芳子さんの写真ができたから取りに来てください』という電話を目の前で聞くと、昭男さんが、すぐ家を飛び出したのだという。

吉村さんと話しているのは、嫁に行った吉村家の長女である。

夫君の塩月さんや子供たちも、今日は、一緒に法事に来ている。

芳子さんの松原家も、昭男さんの小宮家も、女系の家族と言おうか、法事があるとそれぞれの連れ合いと、一緒に来る女性の縁者が多い。

さらに、所帯がふえただけ、一気に子供たちも加わり大勢の家族があつまる。

『お母さんに会えるかもと……思ったのかねえ』

嫁ぎ先から理容師の夫と一緒に来た昭男さんの長女が言う。

今日は、……法事なのだ。

昭男さんは何となくわかってきたが、みんなの顔が白く浮かんでいて不安に感じる。

『写真屋まで行くのかと思ったら、駅前で購入物をしたんだ。支払いは、オレが寄つてしたよ、ほれ』

吉村さんは手に持った紙片をちよつとみせる。

『……その次が公園だったんだ』

義兄は続けた。

『それから、もう、ぶらぶら歩き出した。まあいい、知ったひとばかりのところだから、何も心配することはなかったけどさ』

三回忌の法事に来てくれた昭男さんの義兄の吉村さんは、義弟の昭男さんの行動の、急な変化に対してとても同情的な見方をする。

自分の義弟にあたる昭男さんの精神状態が時々乱れるのを知ってからは、その分野の医学的書籍もよく読むようにしている。

お互いに、永く連れ添った姉妹の伴侶を、ほぼ同じ頃になくしてしまったのだ。

形式的な姻戚であったふたりの関係が、またたく間に、共通の似通った境遇になった。

これからは、望んでも望まなくても、違う次世代の娘たちに、残された人生の指針と面倒を預ける覚悟を迫られる。

吉村さんの税理事務所には有能な所員が何人もいて、吉村さん自身が日常、細かなことをやらずにすむ。かなり、時間はあるのだ。

事務所では、三階にある自分の部屋に上がって、管轄外ともいえるいろいろな本を読むが、最近、加齢や姻戚関連の遺伝に触れた本も読み始めた。

高齢者に多い認知症にもくわしくなった……高齢者にはうつ病の症状が多いと知った。

(*) 高齢者のうつ病

認知症と紛らわしい病気に、高齢者のうつ病があり、定年退職や家族の死などをきっかけに、発症することが少なくない。うつ病になると、声をかけても反応がなく、外出したがない。集中力が低下しても覚えが悪くなる症状とともに、体の倦怠感や食欲不振、不眠などを伴うのが特徴である。本人がもの忘れが多くなったと訴えることもあるが認知症の記憶障害とは違う。

うつ病は、認知症のような脳の変化がみられないので、CT検査やMRI検査をすればすぐにわかるらしい。うつ病がそのまま認知症になることはないが、家に閉じこもり刺激の少ない生活を続けていると認知症になる可能性は高くなる。認知症とうつ病が併発している場合があり、専門の医師に相談し適切な治療を行うことが大切、と本には書いてある。

またまた、義兄は、難しい医学書を読んだあとの偏(かたよ)った知識で、親戚の娘婿たちに話しをはじめた。どっちもどっちだ。

昭男さんも周囲をまったく無視だ。

昭男さんは座ったまま別のことを考えていた。

長崎に行ったときのことをまた思い出した。

芳子さんの夢をまた見ている……花がとてもきれいな季節だった。

諫早の眼鏡橋を二人で渡って、ツツジでいっぱい公園をふたりで歩きまわった。

長崎の町には色のついた電車がいくつも走っていた。教会も訪ねた。

階段の途中で背の高い、赤い鼻の神父さんと写真を撮った。

晴れた空に手を上げて……それから平和の像に近づいていたんだ。

心がふらつくと、人の顔がなんとなく浮いて見えてくる。

逆光線を浴びた人の姿を見るように、白い輪郭が外郭に現れる。

それから……でも、耳はよく聞き取れた。

電気ソージ機の音がしていた。

ベルを押した。

女の人が出てきた……この家だ。

『芳子さんのお父さんはいらっしやいますかあ』

などと、言ったようなつもりだった。

『また、発作が起きたようよ!』

自分の娘に……そう言われた。

昭男さんの次女は、結婚して家を出ていたが、浮気ものの夫が、三度も交通事故を起こして失職したのを区切りに将来を憂い、決心して子供を連れて帰ってきた。今は昭男さん夫婦の所帯に戻り、芳子さんが亡くなった後も、保育園の保育さんとして、勤務しながら、自分の子と父親の昭男さんの身の周りをしてくれている。

次女は良恵さんという。

さつき、昭男さんを『じじっ！』とよんだ女の子は、良恵さんがつれ帰ってきた子で、昭男さんの孫になる。小学校四年生だ。

良恵さんが言う。

『そろそろ……部屋に入ったがいいわ。お母さんが隣の仏間にいるから』

写真が入った大きな風呂敷包みは手元から取り上げられて、仏壇の手前際に座らせられた。日のあたる側に敷いた座布団のひとつに、褐色のトラ猫がふてねをしていたが、昭男さんが入ってもうろたえず、ゆっくり出て行った。三本足のネコだ。

『まあ、お前もそこがよかつたんかね』

吉村家の次女が言った。

4

身内の客は多くなったが、知った客はまだ来るのだろうか。

昭男さんは尻の下に敷いた小型の座椅子が……もう痛くてたまらない。

前にも同じ経験をしてきたのに……何回も、これと同じ、同じ痛みを感じを味わったような気がする。

昭男さんは少し考えられるようになっていた。

背後で写真を飾りながら話す、女のひとたちの複数の声が耳に入ってきた。

皆、かしましい。女系の親族家族の代表者ばかりだ。

『いい写真ができたのねえ。やっぱり色がついている方がお母さんキレイ！』

『指が見えるので上の方を大きくのばしてもらったけど、この方がいいね』

『料理は、お母さんの右に出る人はいなかった、……わたしも、少しは味を覚えたけど』

良恵さんもポツリと言う。

芳子さんは保育園で調理の仕事をやっていたが、毎日、重い鍋や大きな容器を持ち上げている人の指は、痛々しくゆがんでいた。

惣菜調理の経験があった芳子さんは、昭男さんが定年退職した数年後、保育園の調理手伝いで働きに出た。小額の年金（三号配偶者）を六十五歳でもらえるようになるまで四年くらい続けて働いた。

『この置物も、お母さんが大事にしていたのにね』

昭男さんの長女が埃（ほこり）を布ではらう。

馬の置物は、この頃までこんな近くで見たことはない。

仏壇の前の飾り棚の一番手前であって、人工的だが、本物の馬の皮のような強さと光沢の皮膚を持つ置物だ。昭男さんが午年（うまどし）で、その昔、片手で持って、ヒヒンとおどけて鳴いたことがある。

かたちが気に入っていた……スマートな馬のぬいぐるみだ。

もうすぐ、昼の一時だ……法事が始まる。

昭男さんは、芳子さんやその父親の姿が見えないことが、また、不安に思われ出した。人の顔が浮いて見えて、気分がそわそわし始める。

坊さんを待つまでのひととき、義兄の吉村さんが昭男さんの左側に来て、たたみの上に座った。仏壇からそっと写真をおろしてきて、昭男さんに直（じか）にみせてくれた。

カラーになった女の人の上半身の写真だ。昭男さんが怪訝（げげん）な顔を見ると、

『そのひとはあなたの連れ合いの芳子さんではないか？』

昭男さんは大きな額に入った女の人の写真をみた。

ぼんやり咲き乱れた花壇を背景に、白い服の女の人が笑っている。

『このひとが芳子さん……』

そうだった……この人には見覚えがある。

『このひとなら……さつき会った』

昭男さんは思い出した。

この人に……耳当て帽子の白衣のこの人に……表で会ったのだ。

昭男さんは、ひよこひよここと歩いて、また表に飛び出した。義兄が急いで追いかけた。

『迎えにきていたんだよ。お母さんが……保育園で働いているときの格好してさ』

上の娘が言う。

『来てたんだよ、お父さんが家に帰れるかどうか……お母さんが心配して見てたんだ』
女の人たちは、写真を見ながらだまった。

『……俺には何も見えなかった』

昭男さんを連れて戻ってきた義兄が、不満そうに言った。

5

お経が始まった。

お経はとても長く、聴いている昭男さんには、以前とちがう韻律に思えた。

『ナムライシヘンジョウゴンゴウ……』と聞こえ、耳に慣れていた南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）とは言わない。

（*）真言宗…南無大師遍照金剛（なむだいしへんじょうこんごう）

弘法大師、空海が開いた宗派で、真言宗は真言密教とも言う。護摩壇で護摩木を焚くことで知られ、『即身成仏』を教えの根本とする。密教の修行をすれば、誰でももただちに仏になることができるという教えである。

804年、31歳のとき、空海は最澄と同じ船に乗って唐に行く。帰国後の空海は、書の達人だった嵯峨天皇に重用されて高野山に金剛峰寺を建立し真言宗を開く。

真言宗は分化し多くの派が生まれているが、本尊は大日如来、主な経典は大日経、

金剛頂経で、南無大師遍照金剛（なむだいしへんじょうこんごう）と唱える

『家族みんなで、あんたの実家の真言宗に入れてもらうようにしたんじゃないか』

怪訝な顔をしながら、足をさする昭男さんに、義兄が小声で知らせた。

『両親が元気な頃からだ。そうしたいというのは、松原の両親も芳子さんも希望したことだったんだよ、昭男さん』

吉村さんは言った。

『さあ、みんなで一緒にお線香を上げよう。そのうちにまた、芳子さんに会えるだろう』
昭男さんは、毎朝かかさず仏壇にお膳を供えて、とても信心深かった芳子さんを思い出した。昭男さんは嬉しそうな顔をした。

『ナムライシヘンジョウゴンゴウ』

坊さんが帰った。

尻の下に敷いて膝を楽にするという座椅子は、足がとても痛かった。

昭男さんはこの経験が前にもあったように思う。法事のたびに学生時代にスポーツで傷つけた関節が痛むので、芳子さんが小型の座椅子を取り寄せてくれた。

あれは、おばあちゃんの葬儀の時からだ。

わかってきた……そう思いたくはなかったのだ。

芳子さんの両親は……ふたりとも亡くなって、もうこの世にいないんだ。

三本足の猫がぴよんぴよん跳んできて、また座布団の上に寝そべった。

裏通りの坂道で、車に右足をひかれた赤い野良猫を、芳子さんが病院に運んで、手術してもらった。

三本足でも生きていければよいのだと言った。

野良猫の本性が残っていて、昭男さんにはフーっといって爪を立て、なかなかつかなかった。その猫だ。

昭男さんは、涙が出てきた……そして、わかった。

『そうか、今日は芳子さんの……ぼくの芳子さんの、三回忌だったのだ』

(*) 三回忌

年忌の法要は法事と呼ばれており、亡くなった翌年が一周忌、その翌年の2年後が三回忌である。三回忌からは亡くなった年も含めて数える。一周忌と三回忌は、四十九日法要に次いで大切な法要である。家族や親族のほか、故人と縁の深かった友人や知人を招いて法要を営む。当日に都合が付かない場合は、事前に営むが、三回忌以降は数え年の数え方で実際の経過年数とは一致しない。

昭男さんは、しばらくするとまた、『芳子さんのお父さんはどこでしょうか?』と言いはじめた。人の顔が浮いてみえたようになり、輪郭が逆光線をあびたような白い線になる。

猫も動かない陶器のようになる。

『芳子さんはどこでしょうか?』

『うしろの写真にいるよ』

みんなが言う。

『どこ……どこ辺にいる？……探してくる』
と、くり返す。

義兄の吉村さんも、奥さんの敏子さんを四年前に亡くした男やもめだから、同情して涙を見せる。愛妻を亡くした苦しみから、いつまでも逃げられないでいるのだ。

『ボケルことはいいことなんだ。オレは……死んだことを忘れられないから……時々、たまらなく悲しくなる。昭男さんには……死んでないと思ってまだ、一生懸命、探すひとがいる』と言う。

吉村さんの長女と結婚した塩月さんも、この際、太りすぎから来る認知症の講義をまたまた、吉村さんから受ける。吉村さんは税理事務所の所長さんだが、細かなことは部下の所員たちがやってくれるので、日頃は、ひまに任せて専門外の専門書を何冊も読んでいる。

(*) 認知症の危険因子

生活習慣病やライフスタイルは認知症とかわるので、予防と改善によって認知症を防ぐことも可能になる。認知症は、高齢になるほど高く、八十歳を過ぎると増えるが、高血圧や糖尿病、高脂血症、不整脈、肥満などは、脳血管性障害による認知症の因子になるだけでなくアルツハイマー病の危険因子、高脂肪の食生活や運動不足は、肥満や高血圧、糖尿病など生活習慣病の原因となる。

毎日の生活に変化がなく、興味の対象がなくなると脳は衰える。頭部外傷や、その他、たとえば、喫煙は、高血圧や動脈硬化の原因となるため、認知症の危険因子と考えられる。アルコールの飲み過ぎも脳血管障害の原因になり、アルコール依存症になるほど大量に飲むと大脳や小脳が萎縮して認知症になることがある。

危険因子は、挙げるといよいよきりが無い。

同じ家系ではないから大丈夫かもしれない、と吉村さんの長女は言う。

母方の義母のサキおばさんの例もあるし……、どうかな。

三本足の猫がやってきて、また、仏壇の前に寝転がった。

芳子さんが近くにきているのかなと昭男さんは思う。

多弁だった前田のおばさんが遅れてきた。昭男さんの前にキチンと両手をついてあいさつした。

久しぶりに顔を見せたおばさんが言う。

『昭男さん、もう、私を忘れたの、この間はしっかりおぼえてくれていたじゃないの。猫のようにまとわりつかないとすぐわすれるのね。』

芳子さんのおしゃべり友達でとても仲がよかった。

昭男さんが動脈硬化のため、先々で、腎不全を経て腎透析になる運命であることも、なぜかこの前田のおばさんには知られていた、が、ふれまわってはいない。

芳子さんが悩んで、漏らしたが、しっかり口止めしたのだ。

五年、十年先には、昭男さんが腎不全になり、腎透析の必要がでてくるかもしれないと医者が示唆した。予後がよくないという医者の言葉に昭男さんがとても落胆し、加齢とともに体調が戻らない可能性が強いことを知って、やけを起こした。

退職後、これからという人生を考えているのに、四、五年先に、腎不全や腎透析で療養生活から免れなくなると思いたくなかった。

そんな昭男さんに

『七十歳まで生きようと考えればいいじゃない』

と、芳子さんは言った。

『私が一緒に生きて、あなたより、少し遅れて死んでやる。三回忌にお坊さんと一緒にお経をあげてくれる人がいないと、方向音痴が道に迷って困ろうもん！』と。

死んでしまう人がもつと多いのに……甘えていた。

自分がいつまでも子供のように駄々をこねているように思われた。

癌や事故で死ぬのとはちがう……苦しんで急いで死ぬのではない。

毎日、寿命を確かめ、味わいながら生きてゆけるのだ。

芳子さんに言われて、なぜか少し心が落ち着いた。

その芳子さんが先に逝(い)くなんて考えもしなかった。

法事をして、お坊さんと一緒にお経をあげてくれるのは、芳子さんだと思っていた。

冥土で道に迷ってさまよう昭男さんのために、芳子さんが三回忌までは法事をしてくれるものと思った。

信心深く気強い芳子さんが、自分の死期を知るまでそう言いつづけたからだ。

昭男さんはそれを当たり前の約束として信じていた。

それがいつの間にか、……どっちかが死んでも、三回忌までは残った方が生きて法事

をしてあげましょうということになった。

三回忌までは……そしてそれは……信心深い芳子さんに対する昭男さんの約束になった。

あれほど、あと十年、せめて五年、自分では生きたいと思っていたのに……

芳子さんが死んでしまうと生きたい火はすぐ消えた。

生きていてもうれしくない……生きていようなんて考えない。

この心の変化は予想だにできなかった。

7

翌日はまた、富永スーパーの前から出るデイサービスのバスに乗った。

近くにある介護施設から、歩いて手はかからないが、すごし方がわからない昭男さんのような年寄りたちに、毎日迎いが来てくれる。

『ご案内』 月曜日～日曜日の午前九時三十分～午後三時まで（祝祭日もご利用できません）

■ご利用料金 利用料の一割＋食事代＋日用品費

（注）介護認定により、要介護度、入浴の利用について金額が異なりますので

お気軽にお尋ね下さい、とある。

誰も反対しない。

年寄りが行ってくればみんなそれでいいと言う。

思考や行動が、通常ではあまり変わらなくても、昭男さんをひとりで家においておくのは心配な存在だ。

何か浮かんで思いつくと、どう動き出すものか、傍目で見ている方にとっては心配になる対象らしい。

次女の良恵さんは、保育園勤めをやめるわけにはいかない。

昭男さんが毎日通所介護サービスに、出かけていてくれれば手がかからない。

義兄の吉村さんは、法事の後も、松原家にたびたび顔をだしてくれるようになったが、昭男さんの面倒をみる良恵さんの気苦労はかわらない。

グループホームの広い施設の一廓（かく）では、春のこの時期、関連大学から来ている医者が介護スタッフに講義をしている。実は、昭男さんは、だいぶ若い頃、医薬品や検査用薬品のプロパー『学術宣伝員』をしていた。精神科や心療内科などの病院を、定期的に訪問し、医者や医療従事者たちと、仕事上、よく話をしたことがある。

今はまったく有用な知識はないが、その頃と同じ雰囲気を感じると、白衣の人の言葉がとどころどころ、わかる気がするの不思議だ。今日、医者は、昭男さんがこっそり覗くガラス張りの部屋で、こんな話をしている。

（*）医者の話から

……脳血管性障害による認知症は、血管の老化が原因で血管が老化すると動脈硬化を起こしやすい、脳梗塞や脳出血、くも膜下出血などの病気を起こす。その結果、血液によって酸素や栄養が届かなくなった脳細胞が壊死する。脳梗塞がいくつも同時に起こる多発性脳梗塞では、脳梗塞の数が多ければ多いほど認知症になる危険性が高くなる。

ある能力は低下しているのに、ある能力はしっかりとっているという「まだらボケ」の状態がみられる。人によっては、自分が病気だという認識をもつため、とても悲観的になる。脳血管性障害による認知症は、脳梗塞や脳出血、くも膜下出血などの発作があったときからはじまり、発作が起こるたびに進行するので、次の発作を防ぐことが大切になる……。

時々漏れ聞こえる話し言葉の断片に懐かしさを覚え、自分が現役に返っているように思ったりして同調する……その間だけである。

われに返ると苦しくなる。

ホームで、仕切りの外にかがんで、講義を聴いていると職員が追いかけてくる。

昭男さんどこへいくのと……追いつがられる。ギンギンガラガラ陽（ひ）が沈むを聞いているグループに逃げ込むか、黙して静かにTVを見ているグループの中にうまくもぐりこむと、もう追いかけてはこない。

眼が届くところにはないと、入所者がひとりで動いたり走ったりして、転んだりすると責任を問われる。怪我をされたら施設の責任になり評判に傷がつくことになるから、短時間入所であっても、寄り固まっていけないと自由な時間をもらえないのだ。

芳子さんのことを考えようとしても、忘れてしまう。次に思い出すまでがだんだん長

くなる。記憶のよみがえりはじめは心が乱れてとても疲れる……記憶がない方がしあわせかもしれない。いいことばかりを覚えておけばよいのだがと思う。

そんなことはわかってらい！ 忘れた振りをしているのだと思ってくれてもいい。

吉村義兄は死んだ奥さんのことが忘れられず、悲しむことで自分の心が楽になることを知っている。でも、昭男さんのように、探し回るだけでいつまでも見つからなければ、悲しみは来ない。忘れられれば楽になるのだ。だから、今日も昭男さんは記憶のなかを何度も探して回る。

芳子さんは料理がうまかった。

総菜屋さんの跡取り娘であったからだだが、工夫を凝らして、いろいろ、面倒な仕込みを要する家庭料理をつくってくれた。

家に帰り着くと、青梗菜（ちんげんさい）！、青梗菜（ちんげんさい）！

そうだ……料理の残りがまだ小分けして冷蔵庫に冷凍してあったはずだ。

業務用惣菜を入れていた自宅の、大きな冷蔵庫の戸を開ける。

門司の近くの『将棋』の名前がついた店で、定番のうまい料理を見つけた。

高血圧で動脈硬化が進んだ昭男さんには、塩気が少なくてもおいしい味の野菜料理が必要だった。昭男さんの言うチンゲンサイとは本当はホイコウロウ料理のことで、青梗菜（ちんげんさい）料理とはまったくの別物であった。

芳子さんの作ってくれたチンゲンサイ（ホイコウロウ）は、中華の凝った味でなかなか飽きを感じさせない料理だった。

芳子さんは料理がうまかったが、人にもいろいろ教えた。

次女の良恵さんが受け継いで、似た味を作って、冷蔵庫に保存してくれている。

芳子さんの味と比べると、今ひとつちがうが、これもおいしい。

ホイコーロとか言うのが、本当の呼び名だが、呼びにくいので昭男さんはまだ名前を覚えることができない。

青梗菜（ちんげんさい）は入っていないのに、チンゲンサイという名をつけて、勝手にそう呼ぶ。

（*）ホイコーロー【回鍋肉】 ホイコウロウ

《中国語》中国の四川料理の一。豚バラ肉とキャベツ、長ネギなどを炒（いた）め合わせ、唐辛子味噌と甘味噌とで味を付けたもの。

前田のおばさんは、昭男さんが定年退職後も夜勤に出ていた頃、昭男さん夫婦の自宅によく顔を出して芳子さんとおしゃべりした。ホイコーローがたくさん出来あがると、家にもらって帰った。おばさんのご主人が好きで食べると言った。

おばさんのご主人は、定年退職した後、ハローワークの紹介で職を得て、半年ほど働いたがその後また失職した。

『年金がもらえるまでもう少し期間があるのに、家にごろごろしておられると、気が狂いそうになる』

というのが、おばさんの口癖だ。もちろん本心ではないが……ご主人がかわいそうだ。

芳子さんがいなくなってから、前田のおばさんも、他のおばさんも昭男さんの家に来なくなつた。良恵さんや子供の友達はあるが、夕方、のぞきに来て、声をかけてくれる馴染みの人たちが来なくなつた。

昭男さんは最近、言葉がうまくでてこない。しゃべらなくなったからだ。

しゃべる相手がいなくなつたこともあるが、少ししゃべろうと思うと入れ歯がつかえたようになり、とても疲れる。

これだと……歩かなくなつたらどうなるのだろう。毎日、歩くチャンスを探している。

奥さんが死んだ後、一日中、波止場を歩きまわるといふ、年寄りの男が書いた新聞記事が載っていた。昭男さんは同じ気持ちで読んだ。奥さんの存在の大きさは、そうなるまで、自己中心的な男には……なかなかわからないものなのだ。

久しぶりに、紫川の河畔伝いに海の方へ歩いたりしてみようか。

この間のように、だれかにまわりつかれてもよい……いや、やめとこう。探しまわる人の数がまたふえる。

チンゲンサイ（本当は……ホイコーロー）の汁を電子レンジで熱くして、今日もご飯の上にかけて。汁の残りは覚まして小分けして、またすぐ凍るように、耐熱容器に入れて、冷蔵庫の奥の方に置いた。

コンロは火災事故につながるからダメだが、電子レンジは使つてよい、と良恵さんのお許しがある。チンゲンサイ汁をかけたご飯をたべながら、ふとつて動きが鈍くなつた三本足の赤猫と話すとき、昭男さんはうれしくなる。

芳子さんの視線がどこか、その辺にあるように感じるのだ。ほらほら、後片付けがま

ずい……とせわしく口を出す声がもう聞こえ始める。

チンゲンサイを食べながら、芳子さんの思い出に浸る。

猫が、そろそろと近寄ってくると、芳子さんに会えるような気がしてまたうれしくなる。チンゲンサイは臭うので猫は食べないから、猫にはチクワをちぎって与える。

昭男さんの足元の布団に猫が乗ってきて、ゴロゴロいう音をたてはじめた。

血圧の薬は今日までにしようか、明日からは服用をやめようか……三回忌の法事の翌日からそう思った。

医者が知ったら、……次女の良恵さんが知ったら、ただではおくまいが……。

8

高血圧で長い期間、降圧剤をのみつづけてきたので、腎臓の血管が、もうじゅうぶん動脈硬化にやられている。薬剤を中止すればそれから数日のうちに、加齢による心筋梗塞か脳溢血か、何かを覚悟をしなければならない。自分でそう思う。

(*) 脳梗塞と脳出血

脳梗塞は、脳に繋がる血管に狭窄や閉塞が起こり、脳を巡る血液が不足し、脳細胞に十分な栄養や酸素が送られなくなる病気。原因となるのは、血栓やアテロームと呼ばれる血管内の重積物で、脳以外の場所で起こっている動脈硬化によって発生する。

また、心筋梗塞や心筋症など、心機能の低下で血流量が低下することで発生する脳虚血が脳梗塞の原因となる。さらに、脳出血が原因で脳梗塞を引き起こすこともある。

身体の麻痺・感覚・運動・意識・構音・嚥下の障害など日常生活に支障をきたす症状が現れる。脳出血は脳内の血管より出血するため、時間とともに頭痛がひどくなり片麻痺や嘔吐、さらに意識が混濁する。降圧剤は血圧を下げるための重石、薬をやめると血圧はその分高くなる。医師の指示に従い薬を服用することが大切になる。

命を終わりにするのは簡単だ、薬をのみ忘れればよい。

昭男さんは、飲み終えたかのようにケースから三日分の薬を取り出して一週先の三日分の仕切りに入れた。すぐには、飲み遅れているとは気がつかれない方法だ……。誰かが残りを正確に数えればわかるけれども。

『どっちが先に逝っても、三回忌までは生きて法事を行い、仏様になる魂の面倒をみてあげること』

それが、信心深い芳子さんの約束だった。

自分のほうが寿命が短かいと思つたのに、肺癌で……。リンパ系の癌腫で芳子さんの方が先に逝つた。

『あなたが先に行くと方向音痴で道がわからんだろうから……。三回忌の法事にはあなたがお坊さんと一緒にお経をあげてください。冥土で待っているから、道をまちがわないように来てちょうだい』

心底がわからない……。ゆがんだ表情をして病床の芳子さんが言った。

芳子さんが生きていればこそ、生きたいことの意義を感じたが、いなくなると……。あれほど、二年でも三年でも生きたいと思つたのに、生きる意義をなくした。

年をとると肉体的な苦しみから逃れられるというが、精神的な悲しみや苦しみも相応に消えるようにできている……。忘れっぽくなるのだ。ボンヤリと生きていたくない。もう、脳がこわれはじめている。もっと忘れてしまふかもしれない。

三回忌の約束は守れた、……。このくらいでボクも逝(い)きたい。

キチンとやったからもう終わりにするよ。

このまま、生きているとあなたのことまで忘れてしまうと、昭男さんは思つた。

とても、よい気持ちになった。

春の日差しがこころよい。空は、雲が見えない青空になった。

数日後、昭男さんは南小倉駅の北側にある小さな公園のベンチにいた。

サクラがつぼみをいっぱいつけている。

さわさわと、電車が風にこすれて走る音が聞こえた。

昭男さんは、U字型の肘(ひじ)置きがついた木製のベンチに腰を下ろして、公園の横を通り過ぎる長い電車を見ていた。

今朝は、今までになく、強い頭痛と吐き気を覚えた。

『熱があるんじゃない?』

だれかが額に触った手をふりはらった。

気取られないように、〃芳子さんと会うから〃と言って出てきた。義兄が来ていることはわかっていた。

芳子さんに会おうと言えば、ともども、昭男さんの思うようにさせてくれそうなことも知っていた。紫色の石が連なる女物の数珠を持って外へ出た。

途中、通りで、漬物屋のおばさんとまた会った。

『昭男さん 今日はどこへいくの？』
と聞いてきた。

『ちよつとそこまで、芳子さんに会いに行くんです』
と言った。

『まあ……そう』

わらって、口をつぐんだおばさんは、普段着のズボンに板草履をはいた昭男さんを見た。

ズボンにはしみのように汚れがあり、草履はすりきれて薄くなり先端が地面と接している。

おばさんは、

『あのひと（芳子さん）がいるときはコギレイな格好をさせていたのにねえ』
と、つぶやいた。

昔、この市場通りがとてもにぎわっていた頃、昭男さんは脱サラをしてこの市場で起業した。芳子さんの両親から商売の手ほどきを受け、商店街のこの漬物屋さんの前で、十年近く惣菜屋をやった。

景気の変動や食材マーケットの変遷やら、複数の要因が原因で、惣菜業が立ち行かなくなつて廃業し、また会社勤めに復帰した。元の業界で勤めにもどれた昭男さんは、定年で退職するまで十五年がんばった。

『あのおじいちゃんの奥さん……亡くなったの？』

客がおばさんに聞いた。

『うん、』

おばさんはうなずいて、南小倉駅の方へヒョコヒョコ遠ざかる昭男さんをながめていた。

南小倉の公園には線路側に面して昔の型の木製のベンチがある。

砂場の真ん中に、Uの字型の大きな肘掛（ひじかけ）がついているベンチだ。

木枠の輪を手でひっぱって子供たちが連なって遊びをするので、公園の砂場に埋め込むように残してある。まわりの離れたところにある他のベンチは、硬いコンクリート製で肘掛などはない。

ひとつ残ったこの木製ベンチが、昭男さんは好きであった。

花壇をバックに芳子さんの写真を撮ったこともある。

ベンチに腰を下ろし、横を走る電車の音を聞いていると、営業の仕事の成績が振るわず、風邪を引いたことを口実に休もうとした会社勤めのはじめの頃を思い出した。

三十年前のその日も少し頭が痛かった。

その日、本当に休みたかったのに、芳子さんは、

『このくらいで休んだら本当に寝込まなければならぬときに困るでしょう』
と、欠勤させなかった。

布団を引いて寝ているつもりだったのに、枕元でいつまでもソージ機をかけて、機嫌が悪かった。それ以来、精神的に辛い日があっても、休みたいと思わなくなり出勤した。

家では一度も、やさしく看病してもらった経験がない。芳子さんが家で臥（ふ）せった姿も見ることがなかったが、そんなひと（女性）だと言えばそれまでだが、男を育てるタイプの、強い性格の持ち主であつたらうか。

定年退職後のある日のこと、芳子さんと将来のことで意見が合わず、夕食前に二階の部屋に抜け出してふてねをしたことがあつた。

つい寝入ってしまい、腹が減つたので眼を覚まして階下へ降りたが、芳子さんは知らんふりだった。

普通なら、血圧の高い年寄りの伴侶が、五時間以上も音を立てずに真つ暗な部屋に横になっていることを知ったら、何事がおきたのではないかと、一度は見にあがつてくるものだと思うた。

芳子さんは夕食後、テレビの前からはちっとも離れなかつたと良恵さんは言った。

昭男さんはうまく甘やかされてきたのだ。

咲き始めたサクラの花を見ていると、サクラの満開の下、爛漫の花の下で春に死にたいと言う歌があつたことを思い出す。

願はくば 花のもとにて 春死なん、西行法師の歌に心通ずるものが漂う。物思いに浸ってぼけつとしていたら、数珠が左手から外れて地面に落ちた。

拾おうとしてかんだら、今度は、自分の右足の濃茶の靴下に、破れ穴を見つけた。今まで見たことのない大きな丸い穴だ。

芳子さんは気性の強い女（ひと）だった。眼が悪くなると、自分で縫い物が容易にできなくなったことを不満に思い、穴の開いた靴下はともかく、繕いを要する破れものは、すぐ自分の眼にも人の眼にも、つかないようにした。見つけたり見つけられたりすると、とても機嫌が悪かった。自分が外で働いており、家庭に腰をすえて繕（つくろ）ってやる手間や方法がないことを気にしていた。

だから、昭男さんが脱いでしまうまで、いつまでも機嫌が悪かった。

これは、怒られるかな……昭男さんは、気になった。

ベンチの右端に体を預けて、ズボンをたくし上げて、右足の親指側を向方にグツとひっぱるとなんとか穴がかくれた。もう一度、手前を斜めに靴下をひっぱって、はきなおした。

やれやれ今頃、……なぜ、こんなことを、と思い、脱いだ草履を履こうと足を伸ばして突っかけたら、草履が勝手に小砂の上を走って、右先の離れたところどとまった。

尻をベンチに乗せたまま腰をかがめて、はずれた草履のところまで、エイツと右手を伸ばしたら、かろうじて届いた。

やれやれ、……腰をあげようとしたら、ガツンという衝撃を右の後頭部に感じた。

ベンチの肘掛（ひじかけ）で首の後ろを強く打ったのである。

熱い感覚がすこしずつひろがり、やがて明暗になった……そのままわからなくなった。

『バカね、昭男さん』

声がした。

芳子さんが南小倉駅の花壇のあなたからこちらの方に歩いてくるのが見えた。

小倉北方の、菩提寺にある白い仏様の石像にとてもよく似た姿をしている……仏様になったからかな。芳子さんはニコニコして、こっちへやってくる。

街の景色が幾重にも白い輪郭の中に見えるのに、その人は自然にはつきりみえた。

女の人はベンチにもたれた昭男さんの方にまっすぐやって来た。

『もう痛くないでしょう、昭男さん』

空がどんどん迫ってきて、昭男さんは、芳子さんと一緒に、まっすぐ宙に浮いた。

かぶさったサクラの大枝が邪魔になると思ったのに、公園の上を通り越して、青い大空へ抜けた。

『芳子さん、迎えに来てくれたのか。それなら、もっと、早く、決断すればよかった。』

『だめ、許しをもらったから迎えに来たのよ。本当の仏様になるまでは、いくつも審判を受けながら修行をしなければならぬ。あなたが、急に来るから、迎えに行つてよというお許しがでたのよ。』

『それは誰から？』

『とてもえらい、永遠の存在……私たちは見ることができないけど……光のような明るさとやさしい心の持ち主。私たちが生まれ変わるときまで、その方の下で審判を受けながら修業をするの』

『ほう、また生まれ変わるの？』

『そうよ、生前の行（おこな）いが立派であったと判断されて、そうしたいという希望があればね。私の三回忌までの法事をどうもありがとう……昭男さん』

（*）死後2年目の三回忌は、阿弥陀如来（あみだによらい）による審判期と言われる。

審判というのは、地獄・餓鬼・畜生界に落ちた亡者の再審制度で、亡者自身が後悔や反省をしても手遅れであるが、残された親族、縁者による追善供養や回向（死者の冥福を祈る仏事）が、どのように営まれているかということによって判断されるといふ。

『芳子さん やさしくなったなー。仏様になったからかな……』

『下の方を見てごらんさい。あなたのそばに誰か来ている』

義兄は遠く公園の端から昭男さんの様子を見ていた。

義兄は芳子さんに会うと言って、昭男さんが家を出たので、一緒に行つてやろうと後からついてきた。ベンチに腰を下ろしていた後姿が、ちよつと隠れて音がして、右側に傾くのが見えた。

近づいてみると、ベンチにもたれた格好で昭男さんが、草履から外れた足を投げ出していた。

口をあけて満足そうな表情をして……息が絶えているのだ。
女物の数珠が手から外れて地面に落ちていた。

『これでよかったのかい……昭男さん』

義兄は何事か決心したように、大きく息を吸い込んだ。

そして、上着を脱いで昭男さんにかけてやった。

それから、ゆっくりと携帯電話をとりだした。

『わしが倒れても、すぐ救急車なんぞ呼ばないでくれ。病院では蘇生したくない。呼ぶんなら、わしが芳子さんのところに着いた頃にしてくれ』

昭男さんからそう言われていた。

文責。

本作品はフィクションであり登場人物や作中の出来事はすべて創作です

web検索 Wikipedia (2010.06.) で、左記の情報を参考にさせていただきました。

①<http://ja.wikipedia.org/wiki/>

三回忌 真言宗 仏教理念

②<http://www.oyabe.or.jp/day.html>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/>

通所介護サービス デイサービス

③http://www.pref.fukushima.jp/seisinsenta/specify/kawara/senile_depression.html
高齢者のうつ病

④<http://ilkai5.com/dementia/factor.html>
http://ja.wikipedia.org/wiki

認知症の危険因子 脳血管障害など